

「里山と生物多様性」

講師：岐阜大学名誉教授 林進氏

里山・里地をどういったふうに管理すれば、生物多様性の目標が達成できるかと考えておりますこととお話します。そのため、お二人のお話とは重なった部分もありますが、まとめてみたいと思います。改めて確かめるという気分でご覧になってください。

里山とはどんなところ？ 人と野生との関係から見ると

- 最も身近に、人と野生とが前進と後退を繰り返しつつ、**緊張関係を持ったり**、共存したりする場。
- **人の暮らしとの関係の中で**、生物種や個体数の均衡が保たれてきたところ。
- **奥山では築けない**、野生との親しい関係を保ってきたところ。

図1

里山とはどんなところ(図1)、ということで、私は野生生物学にも関わっておりますので、その視点から考える機会も多くあります。特に、サルの問題が最近非常に高まっております、人間の生活の領域と緊張関係を持っている地域が増えております。クマもそうですね。家の中に入ってきて、冷蔵庫を開けていたクマがいたとか。サルが冷蔵庫を開けるっていうのはよく聞くのですけれども、クマがそういうことをやるのかなと思うのですが、実際にいて、人が自分の家に入れない、というようなことが発生しております。

実際は、里山というのは、最も身近に人と野生とが、前進と後退を繰り返しながら緊張関係を持ったりする場であるといえます。人間が下がると、野生動物が来るんですね。そして人間が入り込むと後ろへ下が

る。そういうふうに、特に動物とは対面する場所、直接対面する場所であったわけです。ところが今ではもう、そういうところから人間が完全に後退した。そのため、里というよりも街の中まで野生動物が入ってきている段階になってきております。里山では人の暮らしとの関係の中で、生物種や個体数の均衡が保たれてきたところであるといえます。本当に自然に近い状態の所では、川でも、山の中に入って溪流部分に近くなると水生生物の種数も個体数もガクッと減ります。適度に農業地帯が存在していて、あまり極端な化学物質はダメですけども、有機物が入り込むところ、そういうところで河川の水生昆虫類を観察すると、種数も個体数も多いです。色んな場面で、陸上の植物、動物だけでなく、水の中の生き物、特に水生昆虫というのは、色んな環境がなければ、色んな種が棲むことができません。エサがあり、砂があり、岩場があり、そういった場所が必要なので、生物多様性の中に水生生物も加えていただければいいかなと思います。里山と別表現すれば、奥山では築けない、野生との親しい関係を保ってきたところ、いわゆる身近な生き物たちと私たちの暮らしが重なり合う場という表現で代表できるかなと思います。

里山とはどんなところ？ 人による資源利用の視点から

- 人の一生の間で、**何度かの再生過程**を体験できる場所。
- 単一化されない様々な利用がされてきたところ。その結果、個別に見れば単純さが現れていても、**全体としての多様性**が確保されてきたところ。
- 長い間にわたって、個人利用ではなく、**社会的な関係のもとで利用が統括**されてきたところ。すなわち、**社会的な財産**であったところ。

図2

次は、人による資源利用の視点から見てみますと(図 2)、地域の資源のほとんどは再生可能資源です。再生可能とはどういう意味かと申し上げますと、何度かの再生体験を人間が一生の間に体験できる資源のことを指します。実際に、里山の利用を、特に里山の森の利用というものを調べてみますと、私は殆ど全国の里山を調べてまわったのですが、尾張・美濃地方の里山林の利用というのが、一番多様性に富んでいるのですね。数え切れないほど、利用していた。利用し尽していたというくらいです。この地域の里山は生物多様性に恵まれていたのです。気象条件などによって、その地域にしか棲まないものもあるのは確かですが、ほとんどのものを見ることができ。今私は、地元の犬山だけではなくて、大合併した豊田市の市史を書き直そうということで、その生物部門の総括者をやっておりますけれども、今回は昆虫類だけでも 8,000 種は記録しようというレベルなんですね。愛知県全体の生物の多様性というのは、相当レベルが高い、そう考えて良いと思います。名古屋市は大都市ですから、そこまでのレベルには達しませんけれども、愛知県の県内で見たときに、非常に優れた内容を持っています。

特に、尾張・美濃地方の里山というのは、個人利用ではなくて、社会的な環境の下で利用が統括されてきたところ。いわゆる入会地ですね、それが典型的に成立したのが、尾張・美濃地方です。ほかのところと比べても、ほぼ完璧と行っていいほどの社会的システムを築いていました。それがいまだに続いているところもあります。財産区と名前を変えたり、生産森林組合と名

前を変えたりして、社会的な管理がなされている。社会的な財産だったということがわかることです。個人所有地にかかわってでも、同じような感覚を持って、社会的に維持されてきたといえます。

社会的な共通財産であったことの意義を考える

- 「規範」が存在していたこと。そこに「節度」の観念が生まれた。
- 「自分の利益」ではなく、「共有する利益」が優先した。そこに「抜け駆け」を統制する意識が生まれた。
- 「目先の利益」ではなく、「将来へと持続する利益」を尊重した。そこに「将来から現在を見る」という視点が生まれた。

図 3

それから、社会的な共有財産であったことの意義をどういうふう考えるかということで、書き上げてみたのですけれども(図 3)、一つは規範が存在していた。だからそこに、節度の観念が生まれた。例えば山の木を切ろうという時にも、山開けの日というのは決まっていたのです。それから草を刈ろうという時にも、日が決まっていた、カゴの大きさまで決まっていたわけです。土地の面積、そういったものに応じて、これ以上はダメと。例えば、山の木を切った時には、1 本木を切れば、必ず 5 本以上の苗を返す。山に入る時に、一礼して山の神に祈りを捧げてからしか山に入らないとか、そういう規範と節度、これがセットになっていたのです。まさか、現在のように、そこがゴミ捨て場になるとは考えられないくらいのところだったわけです。

そういうことに象徴されますように、自分の利益ではなくて、共有する利益が優先していた。だから、社会的な弱者を生み出さない。そういう意味が、この仕組みの中

には込められております。だからこそ、抜け駆けを統制する意識が生まれた。それで、悪い事をして抜け駆けをすると、普通の人は10の資源を利用できるけれども、悪い事をしたので8分しか利用させない、それが村八分なんですね。あなたは悪い事をしたので、2割カットという村八分。そういうことから生まれた、社会の規範システムです。

「規範」と「節度」の意義を考える

- 資源利用は、「再生の過程」を含んでいた。
- 「恵まれている」ことへの感謝の念があった。
- 「利用」の中に「儀礼」が含まれていた。
- 適正な利用にあった技術や道具の使用が伝達されてきた。
- 「いのち」への慈しみと尊重の念が受け継がれてきた。
- 相互規制による「価値共有」の理念が築かれてきた。

図4

それから、目先の利益ではなくて、将来へと持続する利益、それを尊重したといえます。将来から現在を見る。自分達の子孫が困らないように、今を我慢する。ごく自然に根付いていた意識です。林学の分野で森林資源の価値評価をするときには、将来から減額してくるのですね。そして今、これだけの価値であるという方式で、計算して価値を出します。明らかに演繹的な考え方ではなくて、帰納法的な考え方ですね。将来こうしたいから、今こうするんだという、そういう発想です。規範と節度の意義があつてこそ、資源利用は再生の過程を含んでいたといえます。自然の再生の力をそぐようなことはやってはダメだということになります(図4)。

私の書いた本にも、山の技術者が、一般的に言うと非常に効率の悪い伐採の仕方を

していたのですね。なんでそんな切り方をするのかと聞くと、これが一番効率の良い切り方なんだと言う。よくわからないけれども一度説明してくれないかという、山の再生力を弱めることが一番非効率なのだという。山の再生力を弱めない伐採が、一番効率的なんだというわけです。まちの人間の効率性は考え方が違うんだというふうに教えられて、以来自分のモットーとしています。それは明らかに、恵まれていることに対する感謝の念があつたと。先ほどお二人も、生物多様性にはやはり、自然の恵みという観念にささえられるという言葉が随分使われたのですけれども、そのことへの感謝の念があつた。だから祈りを捧げる、あるいは利用の中に儀礼が含まれる、消費は命に関わる食べ物であるとか木材も含めて、これの利用に際しては明らかに儀礼があつた。消費は儀礼だというような考え方が生まれました。私たち子どもの時もそうでした。「いただきます」と言わなければご飯を食べさせてもらえなかった。それは、作ってくれた人への感謝とともに、命もいただきますという、そういう意味も含まれているんだというふうに、子ども時代から教えられたわけですね。利用の中に儀礼、消費は儀礼だという考え方が含まれていたといえます。

それから、適正な資源利用に合った道具や技術の伝達がされてきた。ですから、これら無くした時に、資源は絶滅に向かいます。これは世界中一緒ですね。適正な利用をするためには、それにふさわしい技術や道具が必要である。だから、それを変えた時に絶滅に向かう、そういうことになります。漁業なんか典型的ですね。それから、

森林もそうです。チェーンソーくらいなら良いのですが、グラップルみたいなもので挟んで、たった数秒で木を切り倒す。林野庁がそれを使い始めたときに、東大の教授が現場を見に行き、1分あれば大木を切り倒せるんだというふうに担当官が説明したら、その教授は「1分間で木はどれだけ成長するんですか」と質問して、白けたということがあります。

適正な利用にあった道具や技術の使用がとても重要です。そこから、命への慈しみと尊重の念が受け継がれてきた。そして、相互規制による価値共有の理念が築かれてきた。そのほとんどが、今日の日本の社会から失われたのではないのかなと思います。

生物相の視点から見る里山の意義

- 自然界の偶然性では保全されない、人間の土地利用がもたらす「攪乱」条件に対応する生物相が形成された。
- 奥山(原生自然)では住めない生物の「避難場所(レフュージア)」としての役割が形成された。
- 「人里型」の生物相が、生物多様性の重要な部分を支える仕組みができあがった。

図5

これは改めて繰り返すまでもなく、お二人のご講演の中にもありましたけれども、生物相の視点から見たときに、偶然性では保全されない、人間の土地利用がもたらす計画的なく乱条件に対応する生物層が形成されたといえます(図5)。

例えば、日本の水田というのは渡り鳥にとって非常に重要なんですね。自然の湿地では、いつどうなるかわからない。水田は日本人が人為的に作りだした湿地、計画的に作られた湿地、しかもこの時期に日本に来れば、確実に存在する湿地だった。渡り

鳥には非常に重要です。繁殖地から中継地へ、中継地が無ければ越冬地まで旅ができないですね、何万kmも1万kmも旅する鳥にとっては、羽を休め、栄養を蓄える場がどうしても必要です。

生物多様性保全の「第2の危機」

「いのちは創れない」環境省自然保護局

- 長い年月、人手が入ることによって生物多様性のバランスを保ってきた里地里山は、人間が干渉しないことによって、かえって危機を迎えているのです。絶滅危惧種のじつにほぼ5割は里地里山に生息し、わたしたちが昔から親しんできたメダカまでもが絶滅の危機にあります。

図6

里山には、原生自然では棲めない生物の避難場所、リフュージアというのですが、そういう役割が形成された。ですから、ここに棲みついているのだから、もう一度奥山へ戻れ、といっても戻れない生物になってしまっています。だからこそ重要なんだということになります。そういう意味で人里型の生物相が、生物多様性の重要な部分を支えるという仕組みが出来上がった。ツバメなんかもそうですね。人家の軒先に巣を作る。人が管理する、監視してくれるので、安心して子育てができる。完全に人里型になったということのあらわれです。これ(図6)は環境省の自然保護局の「いのちは作れない」という冊子を引用したものです。関山さんが先ほど説明されたもので、第二の危機、ですね。こういうことが言われたとしたというのは、やはり相当里山における人手の後退、そういうものが絶滅危惧種をたくさん生み出している。実に、ほぼ5割は里地・里山に生息し、昔から親しんできたメダカまでもがその危機にあります

ということが確認されています。

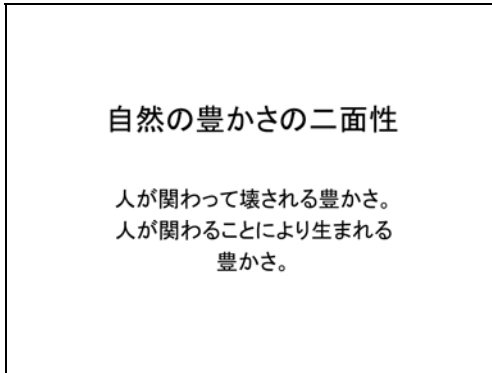


図 7

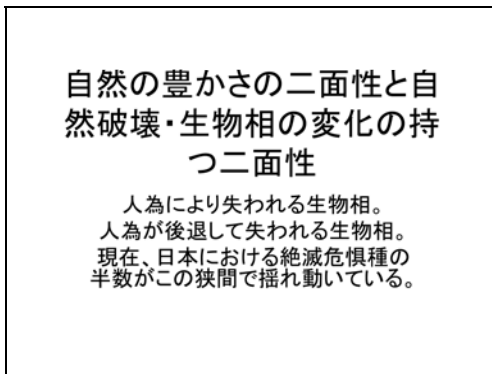


図 8

そういう意味で、自然の豊かさの二面性、生物多様性の二面性とも言っていていいでしょう(図 7、8)、人が関わる事によって壊される豊かさ、それとともに、人が関わる事によって生まれる豊かさがあるのだということになります。この二面性の、バランスをどうやってとっていくのかということがとても重要です。都心の、たとえば屋上緑化をとらえてみましょう。日本花の会という組織があるのですが、コマツビルの屋上に、屋上緑化をされていますが、それだけでも野鳥や昆虫が相当集まってくるんですね。そういう意味で、人が関わる事によって生まれる豊かさというのは本当に重要なことだといえると思います。

現在、日本における絶滅危惧種の半数が、この狭間で揺れ動いている。先ほどフジバカマの写真を出されてみえましたが、キキ

ョウもそうですね。野生のキキョウも殆どの地域で絶滅しています。愛知県では犬山で自生していますが、他ではどうでしょうか。園芸品種のキキョウが逃げ出したのがあるかもしれませんが。それから、カザグルマというクレマチスの野生種ですね、これも犬山は生育していきます。こういうことを考えても、この二面性の中で生物多様性は揺れ動いているということになります。しかし、愛知県での自生地は局限されています。

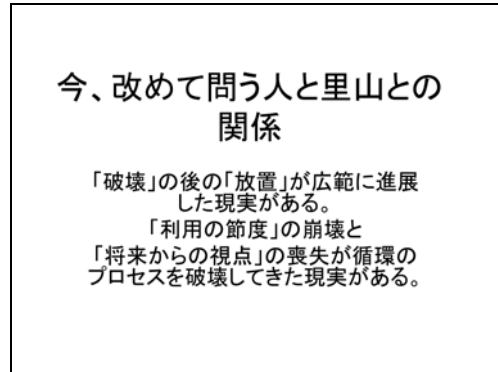


図 9

結局、一時日本列島改造ということで、どんどん破壊が進んだ。岐阜県の富加町というところが近くにあるのですが、実に、町の面積の三分の一がゴルフ場になった。これらは全部山でした。その後は、ほとんど利用されないまま放置された部分もありますし、それとともに、ゴルフ場にならないまでも、手が入らなくなった里山地域というのが増えていったわけです(図 9)。破壊の後に訪れたものは回復ではなくて、放置であったということになります。これが広範に進展した現実があります。これはもう、利用の節度の崩壊と、将来からの視点の喪失が循環のプロセスを破壊してきた、そういう現実があるといっていると思います。飛行機で、愛知県、岐阜県さらには日

本海、北海道へ向かう風景を見ると、本当にゴルフ場だらけですね。中国地方もそうです。これらが今、放置された状態になっています。

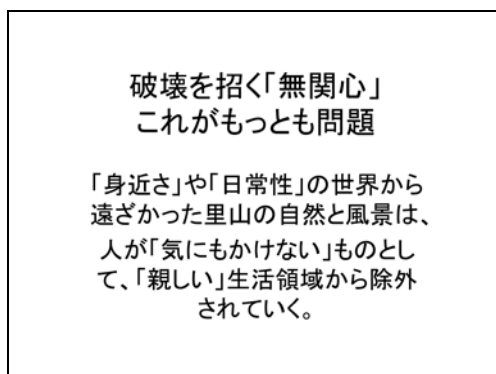


図 10

積極的に破壊しようとする意識があれば、また積極的にそれを回復しようという意識が生まれます。でも、無関心は何も生み出さない、ということになります(図 10)。市民活動をやっている、無関心層が一番敵だと思っています。向かってくるのはむしろ、味方になる。しかし関心を示さないものが、最も問題だと。だから、身近さや日常の世界から遠ざかった、里山の自然と風景は、人が気にもかけない、親しい生活領域から除外されていく。風景が変わっても全く気づかない。レイチェル・カーソンさんが言われたように、星空のこともそうですが、夕焼けもうそう。1年間に何回夕焼けを見ましたかと質問されて、答えが返ってこないですね。見ようとさえすれば何時だって見られる。だからこそ人は、そのことに関して無関心だと、レイチェル・カーソンさんは言っていますが、まさにその通りです。知床のブナ林を守れと運動した人も、自分の家の裏山にある里山の破壊に関しては何の興味も示さなかった例はたくさんあります。そういう意味で、親しい生活

領域というのは大事だというふうに漆原美代子さんが使われた言葉ですけれども、里山はそこから除外されている、といってもいいかと思います。

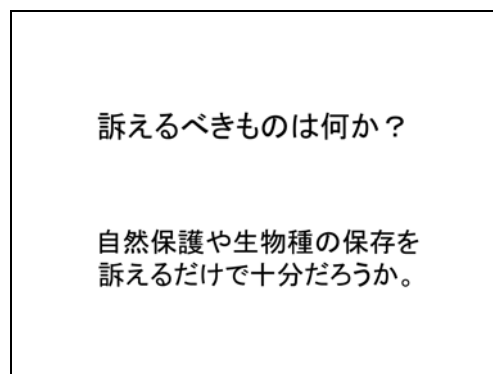


図 11

その時に、生物保護だとか、生物種の保存を訴えるだけでは、十分ではないだろうと思います(図 11)。もう一度、人と里山との関係を再構築する、都市は都市なりに緑を回復していく。それを入り口にして、次は里山地域、それから奥地の森林地域、そういったつながりを持っていくということが大切です。特に、里山地域はその中間地点になりますので、非常に重要だと私は考えております。

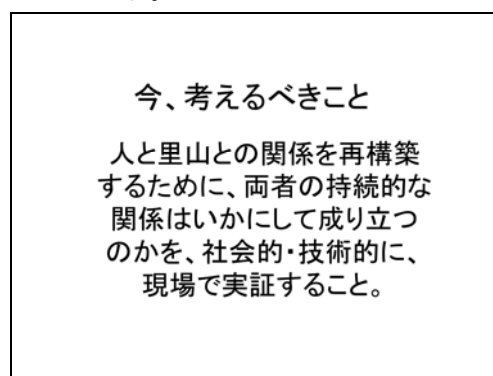


図 12

もう、山村を対象とした農林水産省の主要政策課題はそうそうありません。現在中心となっているのは、いわゆる中山間地域ですね。そのうちに、都市農業をやろうと言い出すのかなと思っているんですけど

も。山村地域は放置されております。もう、里山で人と自然との関係を再構築するしかないんですね(図 12)。それを社会的、技術的に現場で実施をする。社会的なものとはソフト面です。技術的なものとはハード面。ランドスケープというのは、まさにそこにおいて成り立つと考えられるのではないのでしょうか。ですからまずは、里山の森、特に森の価値を見出す(図 13)。近い森のひとつとして、竹藪があります。竹林ではなくて、藪なんですね。竹林は、生かせば宝、放置すれば厄介者、とよく言われます。私が参加している NPO でも、個人所有者からタダで借りて、犬山に嵯峨野の竹林を作ろうということで竹林塾というのを始めるのですが、そこで農業塾と竹林塾を持つことになります。農業塾は、放置された遊休農地を生産的に活用する、そういう活動です。そうすると、無限とっていいほどに人間の利用を受け入れてきた里山の森は生き返る。そしてそこに築かれた自然誌、これを取り戻そう、これが一番大事です。動物園で生物を保存してもあまり意味が無いわけで、生物との関わりも暮らしの場で、もう一度考え直すということになります。

まず、里山の森の価値を見出すことから始める

無限とってよいほどに、人の利用を受け入れてきた里山の森。

そこに築かれた「自然誌」を取り戻すこと。

図 13

人と森との関係が希薄化すると、森は単層化します(図 14)。人工林が悪いというの

ではなく、人工林も多様な森にする、そういう技術が昔からあったのです。しかし、森林工場という言葉が一時生まれたように、森の単層化と利用目的集中化が進行しました。林業でもいわゆる三寸五分の柱、柱材生産に特化する。そうなった時に、非常に単純な森に人工林はなっていたわけです。この様な森は間伐を繰り返さなければならぬのですが、それが今放棄されている。お金にならないということで間伐もされずに放棄されている。片や、利用集中した時に、過剰利用といったことが裏腹の関係として起こるのです。そういうことが、結局生物多様性を崩壊させていくということになります。資源再生過程が、閉塞状態に陥るということになるかと思えます(図 15)。

人と森との関係の希薄化がもたらすもの

森の単相化と特定の利用集中による過剰利用が進展する。

図 14

過剰利用のもたらすもの

資源再生過程の閉塞による里山林の破壊と荒廃

図 15

都市からみると、最も身近な自然の環境である里山、これが荒廃するという事は、

同時に山村の荒廃と一対をなすといえます(図16)。里山地域ではメダカが絶滅していますけれども、山村地域ではスズメがいなくて、去ったのです。スズメは人里型の鳥です。そのため、人がいなくなるとスズメもいない。子どもがいなくなると、高齢者ばかりの村になると、スズメはいなくなるのです。子どもの姿とよく合うのがスズメです。さらに、限界集落という言葉がすでに政策面でも使われています。後期高齢者という言い方と同じかなと思いますが、早く減んでくれという意味が含められているわけです。人が去った山村で、スズメさえも姿を消した。これは、地域の行政官が一番嘆くことなんですね、スズメの声が聞こえない。そんな村を対象にして、一体どのような行政を組み立てればいいのか、答えのない現実に行政官が直面しているわけです。

里山の荒廃は山村の荒廃と一対をなすことを考える

人の姿が希薄な里山は、山村の「限界集落」の合わせ鏡である。
人が去った山村では、雀さえも姿を消した。

図16

ウエストンという人は、日本の山岳登山のいわば創始者です。「知られざる日本を旅して」という本を、1925年に出しております。そこにこういう言葉があるのです。

「明日の日本が外面的な物質的進歩と革新の分野において、今日の日本よりはるかに富んだ、おそらくある点ではより良い国に

なるのは確かであろう。しかし、昨日の日本がそうであったように、素朴な、絵のような美しい国になることは決してあるまい」と書き残しているのです。残念ながら、これは的中した。山村歩きをしていて、あるいは里山地域を歩いていてそう思います。雑草が生い茂るままに放置された遊休農地は、決して美しくないし、生物多様性も減少するということがいえます。ウエストンがこの言葉を残した、そのことを読み解いた本があります。「逝きし世のおもかげ」渡辺京二さん、平凡社が販売しています。彼は、ウエストンの嘆きは、景観の喪失にとどまるものではない。風景の中には人間がおり、生活がある。素朴で美しかったのは、何よりもまず風景のうちに織り込まれる生活の意匠であった。その意匠が減ったのであると記しています。(図17、18)

ウエストン
「知られざる日本を旅して」(1925)

- 明日の日本が、外面的な物質的進歩と確信の分野において、今日の日本よりはるかに富んだ、おそらくある点ではよりよい国になるのは確かであろう。しかし、昨日の日本がそうであったように、昔のように素朴で絵のように美しい国になることは決してあるまい。

図17

減んでいったものは何だったのだろうか

- ウェストンの嘆きは景観の喪失にとどまるものではない。風景の中には人間がおり、その生活があった。「素朴で絵のように美しかった」のは何よりもまず、風景のうちに織り込まれる生活の意匠であった。その意匠は永遠に減ったのである。

渡辺京二「逝きし世の面影」1998、葦書房

図18

日本デザイン学会環境デザイン部会とい

うのがあるのですが、そのリーダーである、ランドスケープおよび建築デザイナーの人も、この言葉をいつも引用されます。こういうものが滅んだのだ、そういうことが非常に重要になります。人間の生存を、出来る限り気持ちの良いものにしようとする合意と、それに基づく工夫によって成り立っていた、文明の基盤となっていた心性、これが滅んだのだといわれています(図19)。だから、ランドスケープデザインというのは、そういう意味では、もう一度人の心をデザインし直さなくてはダメだということになります。そういうふうな発想に結びつくのではないのかなと思います。こういう言い方をすると誰も反論できないですね。「人間の生存を出来る限り気持ちの良いものにする」という表現。生物のためではない、生物多様性のためではない、自分達のために、里山に昔の姿を取り戻すという表現。或いは、都市を緑で飾る。それで、生物多様性は結果として生まれる、それを目標にするのではない。人間が人間らしく生きていく、それが一番大事なんだという表現に結びつくのかなと思います。

「滅んだもの」がもたらしたこと

「人間の生存をできる限り気持ちのよいものにしようとする合意とそれにもとづく工夫によって」(渡辺京二)成り立っていた文明の基盤となっていた心性である。

図19

日本の自然が荒廃する、ヨーロッパ人だけではなくて、アメリカ人もそうですが、外国人が日本に来て怒るのです。日本の風

景が壊れていっている、あれは一体何なんだ？と怒るのです。怒られても困るのですが。いわば、自然の荒廃と、社会の荒廃とは一体である(図20)。安全安心の社会とよく言われますが、今、全く逆の方向に向かっているのではないのか。命は粗末にされる、生物問題と社会問題とが一体的に進行する。そういう視点で、現代日本の現実を見る必要があるかと、そう思います。

**自然の荒廃と社会の荒廃とは
一体である**

生物問題と社会問題とが一体的に
進行するという視点で現代日本の現
実を見る必要がある。

**私は、これを「生物経済の視
点」と呼ぶ。**

図20

虫も殺さない人間、殺す虫も身のまわりにはいない人間が、人を平気で殺す。命の尊さは、自ら虫を捕まえ、あるいは魚を捕まえ、そして命を絶ってきて初めて分かることであろうと私は考えています。

環境と経済は、必ず一体化しないとダメだ。生物多様性の問題と日本の経済のあり方、これは必ず一体化できるし、しなければならぬということ。私は「生物経済の視点」と呼んでおります。日本は、そういう分野での先端にいるということは、先ほどのお二人の講演でも語られたことだったのでないかなと思います。

生物を絶滅から救ったり、保全したりすることを、結果だけの議論にせずそれを実現するためのプロセスの動機付けを主要な議論とする、プロセスを設計する、これが一番大事です(図21)。日本の政治の大き

な欠点で、プロセス抜きにして結果だけ議論する。暫定税率の問題もそう、プロセス抜きにして結果だけ議論している。どういうプロセスを歩んでいくんだということを全然議論しようとしな。そこに、日本の社会そのものの精神の弱さが込められているのではないかと思います。生物多様性も、同じことだといえます。プロセスをどう築くか、それが一番大事だと思います。

解決すべき問題点

- 生物を絶滅から救ったり、保全したりすることを、「結果」だけの議論にせず、それを実現するための「プロセス」をどう築くかを主要課題とすること。
- 個別の問題や場に拘泥せず、常に「全体」を見て対応する視点を確保すること。
- 里山と関わるチャンネルを、可能な限り多様化する「量的な」プロセスを組み立てること。

図 21

それから、常に全体を見て対応する視点が確保されねばなりません。里山というのは、一つひとつの場所を見ると、そんなに豊かではありません。しかし、さまざまな人と自然のかかわりがあるところ、見られるところです。ですから全体としてみた時に、白神山地のブナ林に決して引けをとらない生物多様性の場というのが、目の前に現れている、そういうことになります。だから、白神山地であるとか、知床のブナ林は、それだけ一点だけ見れば十分です。一つの多様性しかありません。これに対して、里山には、まさに多様な場所があり、それに対応するそれぞれの多様性があります。だから、常に全体を見なければダメ、個別だけ見たらダメだということになります。

そのためには、里山と関わるチャンネルを可能な限り多様化する、そういう量的な

プロセスを組み立てることが大事だと思います。どう利用するんだ、利用したいから残すんだということから発し、結果的に色々な生物にも出会うことになることですから、里山を使い尽くす発想、場としてだけではなくて、必ずモノを介する関係を築くことが重要になります(図 22)。生産活動の無い風景は非常に空疎です。そういう場所に決してしてはならない、ということになります。

里山を使い尽くす発想

「場」としてのみならず、必ず「物」を介する関係を築くこと。
「資源利用」の思考と技術こそが多様な里山を形成する。
里山の産物を可能な限り、暮らしの場に引き込む。たとえば、暮らしを規定するエネルギー利用に関わって、最も重要な家庭の熱源として取り入れることが例示される。

図 22

生産の場として復活する里山というものがあります。そこに資源利用の考え方と技術が成り立ち、その結果多様な里山を形成するというプロセスを築かねばなりません。そこで暮らしの場として、特にエネルギー利用というものが非常に重要です。薪に使うという考え方も、要素としてあります。もう一度そこへ立ち戻って、里山を見直してみようということになるのです。

里山の世界 地域文化としての

- 小さな洞の棚田
- 巧みな水循環システムとしての導水路。
- 微細な環境条件に対応する土地利用のモザイク。
- 粗朶までも使いつくし、活力ある里山林を再生する技術。
- 限られた空間と資源だからこそ個性的な生産空間を形成した智恵と技。

図 23

地域文化として(図 23)。文部科学省は里山を、文化財として指定しようとして文化財保護法を改正したのですが、まだそんなに多くはないのですが。小さな村の棚田、水循環システムとしての導水路、環境条件に対応する土地利用のモザイク、粗朶までも使い尽くし、活力ある里山林を再生する技術、限られた空間と資源だからこそ個性的な生産文化を形成した知恵と技。これらは、明治のはじめごろに日本を訪れた外国の知識人たちが驚嘆したものです。素晴らしい芸術。日本の里山の自然社会地域というのは非常に美しい、しかもそれは全て人が作り出したものだ、素晴らしい技術をもった国だ、だから本国に書き送って、こういう国と戦争をしては絶対にダメだということまで言ったのです。こういうことを欧米人が発見して、書き残していった。当の日本人がいつの間にか忘れてしまったものを、外の人がきちんと評価して残してくれたということになります。

里山に学ぶこと

- 短期間に変動させながら、長期にわたって安定させる技術的、社会的システムのあり方。
- 「循環」及び「循環のサイクル」を確保するための原則の確認。工業的な能率性が成り立たないこと。「合自然原則」が最も合理性を持つこと。
- 変動しながら安定する生物界のシステムに学び、「多面性の価値」を求め、「一点集約型」の思考から抜け出ること。

図 24

里山については短期間に変動させながら、長期にわたって安定させる、技術的社会的システムのあり方を学ぼうということになります(図 24)。変動は短い間に起こさないと、人間の短い一生の間に何度も体験できなくなり、「身近さ」から遠ざかってしまい

ます。百年後の話をしても、誰も動こうとしないわけです。

それから、循環および循環のサイクルを確保するための、原則を確認する。ここに合自然原則といったものが成立します。そういう発想が大事です。環境デザインは、まさに合自然原則の技術であるといっています。

生物界は変動しながら安定する、そういうシステムを持っています。だからこそ、ある一点だけを見るとか一点集約型ではなくて、多面性の価値というものを見直してみようということになります。例えば、一つのコップがペンたてになったり、水を飲む道具にもなったり、別のものを入れる入れ物になったり、そういうものなんですね。そういうことを価値としてみていこうということになります。これが里山に学ぶ視点です。

**「暮らし」の視点から
里山に関わる**

「暮らし」の発想が「地域や社会へのつながり」を生み出す。そこに「自分と社会とのつながり」、「暮らしに必要な物は、社会的な関係で守り育てる」発想が根付く。それが「共同社会」の再生につながる。

図 25

それから、暮らしの視点から里山にかかわる(図 25)。暮らしの発想が、地域や社会とのつながりを生み出します。特に、自分と社会とのつながり、自分と自然との関係、自分と生き物との関係、そういったものとのつながりの意識が生まれます。社会的には「結い」という発想になりますが、人間も生き物と「結い」を結ばないとダメだと

いうふうに考えていいかと思います。だからこそ、暮らしに必要なものは、社会的な関係で守り育てるという発想が根付く、それが共同社会の再生であるといえます。だから、自分のためにやるということになるのです。ボランティア活動などありますが、私は全て自分のためにやって欲しい、人のためでもない、生き物のためでもない、自分のために必要だからかかわるのだと言っています。結果的に生まれることは、さまざまなものです。しかし、自分のための、自分の暮らしにかかわるとい意識が根底にあるので、一生懸命関わりますし、持続性ももつわけです。そういう発想を持つということになります。

**人と里山との関係がかつてない
ほどに希薄化している現代**

**「置き忘れてきたもの」を取り戻すための行動を！
荒廃は、森だけにとどまらず、人の心と社会の荒廃にまで拡大していることへの危機感を！**

図 26

さまざまな人間と里山の関係、あるいは里山地域の社会が崩壊の危機に瀕している。そういう意味では、人と里山の関係が史上で最も陰悪化しているのが現代です(図 26)。これをどうするのかというと、私はまだ希望はあると思って、「置き忘れてきたものを取り戻そう」ということで、捨てたのではない、置き忘れてきただけだと訴えています。そうしないと、荒廃は森だけにとどまらず、人の心と社会にまで拡大していく。そういうことへの危機感をもっと共有しましょうという発想になります。

景観十年、風景百年、風土千年
(佐々木 綱京大名誉教授)

Landscape

「逝きし世の面影」は、私たちの心に生きている。それを具体的な「姿」にする技術は、世界的な意義を持つ。

図 27

道路工学の専門家である佐々木京大名誉教授は、「景観十年、風景百年風土千年」という本を出されております(図 27)。景観は 10 年あればできる。しかしそれを風景にするためには 100 年かかる、さらにそれを風土にするには 1000 年かかる。日本の国は風土を語れる、そういう国です。アメリカは、まだ風景レベルですね。ですからアメリカ人は、非常にうらやましがる。そういう意味では、日本には風土という良い言葉が、千年の歴史を込めた良い言葉があります。だから、親しい友人がアメリカにランドスケープの研究に行ったら、「あほか」と言われた。お前の国には十分ある、アメリカに来て何を学ぶつもりだと笑われたと言っておりました。ランドスケープといったものを考える上では、日本は世界で最適な国だと言っていると思います。テキサスから来たアメリカ人が、日本は見渡す限り全部緑だ、テキサスは見渡す限り、全部茶色である、それだけでも素晴らしいという言い方をしておりましたけれども、人が関わる事によって、より豊かな風景が出来上がるということになります。

「逝きし世のおもかげは、まだ私たちの心に生きている」それを具体的な姿にする技術は、日本だけじゃなくて世界的な意義

をもつ。だからこそ、先ほどから話題になっていますように日本で生物多様性をテーマにした国際会議をする、あるいはそれをテーマにしたイベントをすることが、まさに日本の里山が世界につながるようになっていくわけです。これは、明治のはじめに日本を訪れた知識人たちが、全部それを貴重な財産として本国に書き送ったということも、考えてみれば理解できようかと思えます。

日本のため、自分達の暮らしのためであることが、世界につながるということは非常に素晴らしいことであるし、ランドスケープデザイナーとして、それが誇りだと言っているのかなと思います。



福井県提供 図 28

これは若狭の棚田風景ですね（図 28）。これは文化庁によって、伝統的景観として文化財指定されているところです。非常に不便な暮らしではあろうかと思いますが、いわば世界の財産としてどうやって守り育てていくのか。あるいはここからどういうデザインを、新しく生み出していくのか、それが、皆さん方も含めた、今を生きる私たちの課題だと考えております。目に見えるかたちでランドスケープをデザインしてみると、結果的に生物多様性に合うということになろうかと思えます。

生物多様性を作りだそうと言っても、生物種をどれだけ知っているかと言われても、殆ど知らないですよ。木の名前といっても、ごくわずかしかな皆さんご存じないでしょうし、私たちもそうです。それは結果として生まれてくることであり、何を大事にすべきか、何を作り出すのか、ということについて、再度考えていければいいかと思えます。

ありがとうございました。

これで終わらせていただきます。